

---

# マグノリアの咲くとき

瀬戸美月

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

マグノリアの咲くとき

### 【Nコード】

N2563E

### 【作者名】

瀬戸美月

### 【あらすじ】

ようやく内戦の収まったマグノリア王国の王女レイラは戴冠式の前夜、ずっと好きだった腹心の騎士デュノランから信じられない告白を聞く……。哀しみを乗り越えて結ばれる約束。せつないラブファンタジー。

静かな夜だった。

レイラは高鳴る鼓動を抑えきれず、窓を開け放すと果てしない夜空を振り仰いだ。

美しい、夜だ。満月を明日に控えた月は冴え冴えと輝き、星は銀の鈴を連ねたように瞬いている。

そして、この静けさ。レイラには何よりもそれが嬉しい。ナイチンゲール夜鳴鶯の澄んださえずり。噴水を流れ落ちるかすかな水音。そんなあえかな響きにうっとり耳を傾けていられるほど、王宮も中庭も平穏で静かだった。

城壁を見回る歩兵の足音や剣の金具が触れあう音からも、殺気立った緊張感がやっと抜けてきた気がする。

今や、この城はレイラのもの。先王崩御から続いた内乱を鎮め、レイラは懐かしい王城のあるじとなった。

そして明日レイラは戴冠し、正式にマグノリア王国の女王となる。母の夭折後、父王やその取り巻きの貴族たちから冷たく打ち捨てられていた無力な王女が、若干十五歳にして玉座に着くのだ。

それを思うといっそうドキドキして、レイラは胸を押さえた。

「……大丈夫かな」

急に不安になり、独りごちる。

段取りを間違えないだろうか。大司教さまの前でマントの裾を踏んだり蹴つまずいたりしたらどうしよう。

ここは一番、女王としての威厳を見せなきゃいけない時なのに、醜態をさらしたりしたら、せっかく盛り上がったお祝いムードがだいなしになっちゃう……！

無意識に窓枠をぎりぎり握りしめるレイラの背後で、おとなしやかな声がした。

「姫さま」

「なにっ」

反射的にとげとげしく叫んでしまう。振り返ると、レイラと同じ年頃の侍女が蒼白な顔で立ちすくんでいた。レイラは慌てて作り笑いをした。

「ごめん。ちよつと考え事をしてたんだ」

「も、申し訳ありません。お邪魔をいたしましたして……」

「いやいやっ、べつに怒ってないから」

平身低頭する侍女に、レイラはバタバタと両手を振った。

「なに？ 何か用？」

「騎士さまが、お目通りを、と」

「えっ、デュノランが？」

ぱつと瞳を輝かせ、レイラは侍女をせつついた。

「だったら早く、通して通して」

額に浮かんだ汗を袖口で押さえているうちに、侍女に案内されて長身瘦躯の青年が現れた。慇懃に礼をすると、剣を吊った銀の留め具が冴えた音を発した。

佩刀のまま女王の私室に入れる唯一の騎士、デュノランだ。マグノリアの三方を囲む広大な森の侵食から国を護る任を負った家系のひとつ、レイネーア辺境伯の若き当主。そして、レイラにとっては気心の知れた唯一の幼友達でもある。

レイラは市井の少女のように気安くデュノランに駆け寄った。

「デュノラン！ ちようどよかった。戴冠式のおさらいをしたいんで、ちよつと手伝つてよ」

有無を言わず椅子の前に引つ張って行く。

「デュノランが司教さまね。ここにこう、座るでしょ。そしてわたしがひざまずいて、合掌して、眼を閉じて……。あっ、膝を着くのは右だっけ、左だっけ？」

「どつちでもいいですよ。転ばなきゃ」

溜め息まじりにデュノランは答えた。

「そんなあ。決めとかないと何だか落ち着かないよ」

眉を寄せておろおろするレイラを横目で見やり、デュノランは眉間を揉んだ。

「……姫。予行練習はうんざりするほどやったじゃないですか。もう覚えたからいいって仰ったのは姫ご自身ですよ」

「だって忘れちゃったんだもんつ。今思い出そうとしてみたら、すぽんと抜けてたんだ。それはもうすつぽんと、ゼーんぶつ」

「大丈夫ですよ」

無理に座らされた椅子から立ち上がり、デュノランは微笑んだ。

おどけた仕種でぽんぽんとレイラの頭を撫でる。

「ちゃんとここに入ってます。姫は本番に強いタイプですから、いざとなれば火事場の馬鹿力でどうにかかりますって」

「……それ、ほめてるのか？」

「もちろんです」

デュノランはにつこりと笑った。「姫のことは、よくわかってますからね」

「……うん」

見慣れたはずの穏やかな笑顔がひどく眩しくて、レイラは笑いながら眼を細めた。

なんで涙が出てくるんだろう。

きつと気が昂ってるんだ。明日は一生に一度の戴冠式だもん。しかも、ほんの数か月前までは絶対縁がないって思ってた。

「ところで、姫。少々お話ししたいことがあるのですが」

「え？ ああ……」

生真面目な声音に我に返り、レイラは部屋の片隅に控えている侍女に目配せをした。侍女は膝を折って一礼すると、しずしずと退出していった。扉の閉まる静かな音に、ふたりきりになったことが殊更に意識されて、レイラは急に火照りだした頬を押さえた。

そういえば、ふたりきりで話をするのはずいぶんと久しぶりだ。

敵方に追われて逃亡生活を余儀なくされたころは、供がデュノランだけということもしばしばだったが、地位が安定してくるにつれて

供回りが増え、そんなこともなくなった。そのせいだろうか、何だか妙に緊張してしまう。

ちらと窺うと、デュノランの秀麗な横顔がいつになく翳って見え、レイラはどきんとした。何か悩みでもあるのだろうか。

それとも、とんでもない突発事態が起こったとか。あるいはわたしが何だか知らないけど大失敗をしていて、お小言を言いに来たとか。あつ、厨房で宴用のお菓子をつまみ食いしたのがバレたのかも！  
うわあ、どうしよう……！

「 姫。何をひとりで百面相なさっているのですか」

「 えっ、いやあ……」

とつさに笑ってごまかそうとするレイラを、デュノランはじろりと見据えた。

「 いけません、姫。そんな庶民的な顔で笑ったりしては」

「 だってさー、遊び相手がみんなそこらの子どもだったからさー」

「 さー、もいけません。語尾には注意すること。何度も申し上げたでしょう」

「 わかってるよー……」

デュノランに睨まれ、レイラは慌てて言いなおした。

「 わかっています」

「 よろしい」

しかつめらしく頷くデュノランに、しゅんとなってレイラは椅子に腰を下ろした。

デュノランにはどうにも頭が上がらない。レイラの実質的な後ろ楯が母親の出身であるレイネーア辺境伯の一族だということもあるが、それよりも幼いころから護衛兼お目付役として何かと世話になった、一種の刷り込みだろうか。

でもそれは、それほど悪い気分じゃない。デュノランはいつでもレイラの味方だった。デュノランだけが、絶対の味方。どんなに政情が混乱した時も、自分の命が危うくなった時でさえ、全力でレイラを守ってくれた。

戦いにおいては獅子奮迅の働きをし、不死身の騎士と敵からは恐れられ、味方からは尊敬された。敗れて弱気になるレイラを励まし、時には厳しく叱咤して、ここまでの道筋を支えてくれたのだ。

これからも、デュノランはずっとレイラを支えてくれる。そして、かつてのように豊かな、みなが幸せに暮らせる王国を作っていくのだ。

ふたり、手をたずさえて。

そう思うだけで頭の中が薔薇色に染まる。ぼわんと夢見心地になったレイラは、咳払いの音にはっと我に返った。緩んだ頬を引き締め、座りなおす。

「そういえば、話があるんだったな。逃亡中の叔父上のことか？」  
「それは鋭意捜索中です。逃げ込む先は限られていますから、近日中に捕縛できるでしょう。そうではなくて、実は個人的なお願ひがあるのです」

個人的な？

レイラは思わず椅子の腕を握りしめた。

まさか……、ひよっとして プ、プロポーズ とか!？

確かめもしないうちに、レイラの心は天井を突き抜けて舞い上がった。

そうだ、そうに違いない。こんな深刻な顔をしてるってことは。やっぱりデュノランはわかっていてくれたんだ。わたしが彼を好きだっただけのこと。そう。ずうつとずうつと好きだった。ほんの子どものころから。

八つ年上のデュノランは、すごくおとなで格好よくて、しかも優しく我慢強かった。癩癩を起こしやすい手のかかる子どもだったわたしを、彼は決して見放さなかった。

明日、女王として即位すれば、次に出てくるのは結婚話に決まってる。幸い、わたしには決められた婚約者がいない。そしてわたしはデュノランが好き。デュノランは名門貴族の当主。血筋よし、容姿よし、頭よし、腕もよし。女王の結婚相手としてまったく不足は

ない！

つまりは有象無象の輩が名乗りを上げる前にとつと婚約しちゃうばいいわけで。デュノランってば真面目すぎて融通のきかない奴かと思つてたけど、そうだよな、戦場では先制攻撃が得意なんだもんねっ。見直したぞ、デュノラン！ やっぱりわたしの夫にはおまえこそがふさわしいのー！

「姫」

「もちろん、オツケーよっ」

間髪入れずに叫び返され、デュノランは鼻白んだ顔になった。

「そ、それはどうもありがとうございます」

満面の笑顔でニコニコするレイラに、デュノランは深々と頭を下げた。

「それでは、どうぞお元気で。姫のお幸せと王国の末永い繁栄をお祈り申し上げます」

それだけ言うと、デュノランはさっさと踵を返した。ぽかんとしていたレイラは、わけがわからず腰を浮かした。

「え？ え？ なに、デュノラン？ どこ行くの。どういうこと？」

「お暇をいただくお許しを得ましたので」

デュノランは背を向けたまま答えた。レイラはうろたえ、椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった。

「そんな許しなど出していない！」

ようやく振り向いたデュノランは、逆上するレイラに困惑した双眸を向けた。

「今、オツケーよと仰ったのでは？」

「言っていないっ。暇を取るなんてことは聞いてないからなっ」

「……それではいったい何をオツケーされたのですか」

レイラはかあつと頬を染めた。非の打ちどころなく端整なデュノランの顔が、急に憎たらしくなる。

この、朴念仁！

レイラは拳を握りしめて怒鳴った。

「おまえのプロポーズにオツケーだと言ったんだ！」

デュノランは、見たこともないほど眼を丸くした。こんな時でなかつたら、さぞかし間が抜けて見えたことだろう。しかし、今のレイラは微塵も笑いたくなどなかった。気を取り直したデュノランは眉間に皺を寄せ、こめかみの辺りを搔いた。

「……ちょっと待つてください。誰が誰にプロポーズしたんですか」「おまえが、わたしに、に決まってるだろうがっ」「してません」

冷静な声音にレイラはますますいきり立つ。

「だったら今すぐしろ！ わたしに恥をかかせる気が！？」

「まさかそんな」

「じゃあ、わたしが嫌いなのか！？」

「とんでもない」

「さては他に好きな女がいるんだな！？」

「いませんよ、そんなの」

デュノランは悍馬でも扱うようにレイラをなだめた。

「俺にとってこの世で一番大事な人は、レイラ姫、あなたです」

「ほ、本当か？」

がらりと口調を変え、レイラはデュノランの襟首を掴んだ。

「わたしのこと、好き？」

「はい」

喉元を絞められながらも、デュノランはにっこりと笑った。レイラはごくりと唾を飲み、おそろおそろ尋ねた。

「あ、愛してる……？」

「愛しています、心から」

力強い誠実な声音に、指の力が緩む。レイラは眼の奥が熱くなつた。嬉しいのと腹立たしいのと頭がぐるぐる回っている。勢いに任せ、レイラは叫んだ。

「だったらわたしと結婚しろー！」

「それはできません」

「何で!？」

デュノランは、そっとレイラの手を掴み、襟から外した。静かに微笑む。

「姫のお気持ちは嬉しいですが、死者と結婚するわけにはいかないでしょう」

「な、何を言ってる……」

混乱するレイラをじっと見つめ、デュノランは静謐な声音で告げた。

「姫。俺はもう死んでいるのですよ。今、姫の目の前にいるのは、妖魔との契約でしばしこの世に留まっているだけの、あさましい亡者にすぎません」

ぐらりと世界が揺れる。とっさにデュノランが支え、レイラは椅子の中にくたくたと崩れ落ちた。デュノランはそのままレイラの足元にひざまずいた。

「……嘘だ。冗談だろう」

「いいえ、本当です。五か月前、俺は死にました。覚えていませんか？ 敵方に追われ、ふたりきりで森の中を逃げた。後で落ち合う約束をして、姫と別れましたよね」

そう、確かにそんなことがあった。冬の一番寒い時季で雪が降っていた。デュノランが敵兵を引きつけている間に味方のいる城砦まで逃げると、有無を言わず馬に乗せられ尻を叩かれた。

小雪の舞う暗い森を必死で駆けた。一刻も早く味方を連れて来よう。

「……無事だったじゃないか。わたしがレイネアの兵を連れて戻

つてきた時には、おまえはもう敵兵を全員討ち取っていた。たったひとりで……」

デュノランは微笑んでいる。不吉なほど静かに、穏やかに。

「……みながおまえの勇氣と強さを称賛した。おまえは不死身の騎士だとみなが誉め称えた。以来、一気に形成は逆転した。おまえが

、おまえがみなを引つ張ってくれたから、だからここまで来られたんじゃないか。それなのに、おまえがもう死んでいるだって……

…!?!」

「あの森の闘いで、俺は死んだんです」

ゆつくりと、噛んで含めるようにデュノランは言い聞かせた。「いくら腕に覚えがあっても、たった一人で五十人を超す兵に太刀打ちできるものではありません。もちろん半分くらいは叩き斬ってやりましたがね。でも、それが限界です。俺は敵に取り囲まれ、身体中を剣で刺し貫かれた。大地に転がった時にはもうほとんど意識がなかった。……その瞬間、ただあなたのことを想っていました。レイラ姫」

デュノランは手を伸ばし、震えているレイラの指に触れた。

「あなたを守りたいと。あなたがこの国の正統な女王として即位するのをこの眼で見届けたいと。それだけを願い、それが叶わぬことだけが口惜しくて……。その時、森の奥深くに棲まう妖魔が、俺に語りかけて来たのです。生きたいのなら、望むだけ生かしてやるうと。その代わり、死後は妖魔王の宮廷に仕えることを誓え、と」

デュノランはレイラを見上げ、微笑んだ。

「俺は契約しました。ただし、たとえ妖魔の騎士となってもマグノリア王国を害する行為には決して手を貸さないとという条件をつけてね。妖魔は承諾しました。そして俺は女王の即位の日まで生かされることになったのです。人ならぬ妖魔の身として」

「……だったらなぜ、もつと長くを望まなかった!」

レイラは我慢できず、悲鳴のように叫んだ。

「どうして即位の日までなんだ!?! 望むだけ生かしてやるうと言

われたんだろう？ それなら、わたしが死ぬ時まで生きたいと願ってくれればよかったのに……！」

デユノランは哀しげに首を振った。

「呪われた半魔の身でお側に長く仕えることなど、俺にはできません」

「わたしは側にいてほしいよ！ 魔物でも何でも、デユノランであるのなら！」

「……せめて心だけでも同じままでいられるなら、そう願ってもよかったかもしれません。ですが、わかるのです。俺の心は死につつある。ゆつくりと、でも、確実に。俺は自分の心が冷たく変わっていくのを感じる。身体が死なない代わりに、心が死ぬんです。あなたを大切に思う心も、いつかは石棺のように冷たくなり、ただの義務感に変わるでしょう。そんなのは、俺はいやだ。ずっとあなたを想っていたいのです。あなたとともに森を駆け回った時と変わらぬ心のままです」

「いや……！！！」

レイラはがくがくと首を振り、無我夢中でデユノランにしがみついた。

「行かせない。どこにも行かせない。わたしを置いて行くなんて、絶対許さない！」

「姫、どうか」

「いやだっ」

「……姫、聞いてください。俺の身体は死にました。このうえ心まで死なせないでください。今、人の世を去れば、心はそのままに持って行けます。あなたへの愛も国への忠誠も失うことはない。たとえ妖魔の騎士となっても人の心を保つことができます。でも、このまま地上に留まれば、心は朽ち果て、妖魔の宮廷に赴く頃には感情のないただの傀儡に墮しているでしょう。それは妖魔を利用することになる。ご存じでしょうか？ 彼奴らは人の世へ勢力を伸ばすべく虎視眈々と機会を狙っているのですよ。どうか、俺に辺境伯としての

役目を最後まで果たさせてください。妖魔の棲まう森の侵攻を食い止めるのが我らの役目。たとえこの身が妖魔に堕ちても、代々の務めだけは投げ出さないうもりでありますゆえ」

デュノランは涙にぬれたレイラの頬を撫で、そっと額にくちづけた。

「俺はずっと姫のことを想っていますよ。それだけは、どうか忘れないでください」

「いやだ！ 側にいて、デュノラン……！」

「いますよ。心はずっと、あなたの側に」

「見えないじゃないか！」

レイラは涙を散らして怒鳴った。「触れることもできない！ 話しかけても返事をしないんだろう！ そんなのはいやだ。絶対絶対いやだあつ」

デュノランは身も世もなく号泣するレイラの背を黙って撫でていたが、つと身を離し、ベルトに挿していた短剣を抜いた。チュニツクの胸元を緩めたかと思うと、止める間もなくデュノランは短剣を己の心臓に突き刺した。悲鳴を上げかけたレイラの口許を押さえ、デュノランは寂しげに微笑んだ。

「……大丈夫ですよ。俺はもう、こんなやり方では死ねないんです」ほんの少し眉をひそめただけで、デュノランは易々と短剣を引き抜いた。傷口は見る間にふさがり、跡形もなく消えた。

茫然とするレイラの眼に、赤くぬれた刃が映る。デュノランはレイラの手を引き寄せ、その上に短剣をかざした。刀身をぬらす鮮血が掌へとこぼれ落ち、赤い珠になる。それはレイラの掌で生きていくかのように温かく脈打って感じられた。

「俺のハートを差し上げます。姫が持っていてください。そうすればきつと、いつまでも温かいままでいられるでしょうから」

レイラは無言で涙を流した。それは頤を伝い落ち、掌の赤い珠の上にも散った。

「……どうしても行くのか」

「はい」

「レイネーアの一族はどうなる」

「弟がうまくやってくれるでしょう。それに、我が叔父は姫の叔父上のグイドさまとは違って、以前から姫に忠誠を誓っています。誠実な人柄ですし、弟を補佐して王国のために全力で働いてくれるものと思います」

「……疑ってなどいないよ。おまえの家族はみなわたしによくしてくれた」

「近侍にはボーシャンとガエターノがいます。彼らの忠義は決して俺に劣るものではありません」

「わかつている！」

レイラは声を荒らげたかと思うとがっくりと肩を落とした。

「……わかつている。あいつらのことは信頼しているよ。でも、どちらもおまえじゃない。デュノラン。誰もおまえの代わりなど、できやしない……！」

「姫……」

レイラはデュノランの背に腕を回し、ぎゅっと抱きしめた。

「……デュノラン。おまえ、いつも淡々としてたけど、本当はすごくプライド高いんだよな。父上がまだご健在のころ、どこかの馬鹿な貴族と決闘騒ぎになったことがあっただろう。レイネーアを侮辱する暴言を吐いたとかで」

「あれは海沿いの領主のぼんくら息子ですよ。妖魔の脅威がほとんどない地域の。何も知らないくせに、レイネーアの一族ばかりか辺境の村人たちまで臆病者呼ばわりしたんです。この国を守ってきたのは誰かということはどうやら忘れていているようなので、思い出させてやったまでのこと」

レイラは喉の奥で笑った。

「さぞかし身に沁みただろうな。そういう矜持の持ち主だ。もし、わたしのことがなかったら、おまえは妖魔と契約なんかしなかったらろう？ 辺境伯の筆頭だもの、妖魔は不倶戴天の敵。その妖魔の王

に額付くなんて……」

誇り高いデュノランが自分のために妖魔に膝を屈したのかと思うと、レイラは悔しくてならなかった。まるで自らデュノランを踏みつけたような気がしてくる。

「……そうですね」

デュノランはレイラを抱きかかえたまま小さく笑った。「でも、おかげでよくわかりましたよ。俺にとつて一番大切なものは何なのかってことが。命も名誉も、あなたがいてこそものなんです」

「……わたしにそんな価値があると、本気で思っているのか？」

心許なげに尋ねるレイラを、デュノランは力強く抱きしめた。

「信じていますから。姫はきつと良い国王になられる。小さいころからお側ですつと見てきたから、俺にはわかります。姫は民草の声に広く耳を傾け、一握りの貴族たちに都合のよいように国政を動かしたりはしない。妖魔の襲撃に怯える村人たちの苦境もご存じだ。森と海に挟まれたこの小さな国を、暮らしやすく、豊かな国にするために全力を尽くされることと、俺は信じています」

「もちろんそうするさ！ そのために王位継承を主張したんだ。そのために戦ってきた。そのために」

声が詰まり、どつと涙があふれてくる。

「そのために、おまえを犠牲にしてしまったのか？ わたしは

……」

「犠牲だなどと思つてはいませんよ、俺も、斃れた他の者たちも。

みな、姫が国王となり、善政を布かれることを信じ、そのために戦つたのです。それを忘れないでください。俺たちはみな、姫のお心の側に寄り添っていますから」

デュノランは赤い珠をレイラに握らせ、その上から両手で包み込んだ。

「……デュノラン。明日の戴冠式は……」

「もちろん出席しますよ。あなたが王冠を頂くところを見届けなくては。それに、最後にひとつ、贈り物があるので」

「いらない」

レイラは泣きわめきたいのをこらえるため、ぶつきらばうに呟いた。とすとデュノランの胸に顔を埋める。「何もいらない。だから、今はただ、こうしていて……」

静かな鼓動が聞こえる。レイラは涙の滲む睫毛を伏せた。夜が明けなければいいのに、と、レイラは生まれて初めて願った。

母が病床にあった時、内乱に巻き込まれた時、命を付け狙われた時、いつも夜明けが待ち遠しかった。眠れぬ夜、曙光が射すのを心待ちにしていた。

だけど今はずっと夜が続けばいいと思っている。この優しい鼓動が消えてしまうなら、夜明けなんか来なければいい。ずっとこうして星明りの下、抱きあっていられたらどんなにか幸せだろう……。王女としての最後の夜は、デュノランの腕の中で静かに、止めようもなく、過ぎ去って行った。

望もつが望むまいが、朝は来る。

戴冠式は滞りなく進んだ。レイラは宝石で飾られた金の王冠を緑なす黒髪の上に頂き、緋色のドレスに白銀の毛皮で縁取りされたマントを羽織って王宮の露台に立った。歓呼の音が年若い女王の即位を言祝ぎ、無数の花びらが惜しみなく振りまかれる。

露台の突端には石組みの割れ目から枯れ木が一本、天を差してすつくと立っていた。かつて岩の割れ目から伸び上がって美しい花を咲かせていたマグノリアの老木だ。

その生命力に感銘を受けた初代の王がこの地を王城に定めたという、国名の由来ともなった伝説の樹木。今は花をつけることもなく、白く立ち枯れてしまっている。

その木の傍らで、レイラは城下に集まった民に応えて手を振った。何気なく向きを変えた瞬間、ふと、枯枝が指に触れた。レイラは眼

を睜った。指が触れたところから、急に枝がいきいきとした緑に変わり始めたのだ。見る間に新芽が芽吹き、蕾がついた。誰もが啞然と見守るうち、木は眠っていた妖精が息を吹き返したかのように次々に花を咲かせた。

寶石のように美しい紫のマグノリアが、降り注ぐ陽光を受けて燦然と輝いた。城下に集まっていた人々の眼にも変化は映り、どよめきが波紋のように広がる。方々から女王を讃える声がさらに大きく上がった。

「奇跡だ！」

「聖なるマグノリアの木がよみがえった！」

「女王陛下万歳！」

歓呼の声は森を震わせるほどに響きわたった。茫然と花を眺めていたレイラは、はっと肩ごしに振り向いた。居並ぶ人々に混じって、デュノランが微笑んでいた。輝かしい騎士の正装をして、彼は驚く様子もなくまっすぐにレイラを見つめている。

デュノランは何か咳いたようだったが、歓声に紛れて聞き取れなかった。彼は唇に触れた指をレイラの方へ伸ばしたかと思うと、微笑んだまま、ゆっくりと倒れて行った。

動揺の叫びが大歓声に呑み込まれる。レイラはなすすべもなく、立ち尽くしていた。真っ白になった頭の中で、デュノランの名を呼び続ける。ドレスの胸元に忍ばせた赤い珠を布地の上から押さえる。脈打つ鼓動は自分のものなのか、それとも彼の心臓なのか。

刺すように涙が痛い。干上がった喉の奥で悲鳴がかすれる。

「デュノラン　　！！」

不死身の騎士と讃えられたレイネーア辺境伯デュノランの葬儀は

戴冠式の翌日に行われた。女王の忠臣であった比類なき英雄の死は、しかし新生マグノリア王国の結束と決意を一段と強めることとなった。涙をこらえ、毅然とした態度で弔辞を述べる若き女王の姿に、臣民はなお一層忠誠心を篤くしたのだった。

デュノランの誓いは守られた。マグノリア王国はレイラの血筋が絶えるまで長く独立と繁栄を誇り、森との境界が侵されることはなかった。

女王レイラは周囲の強国に屈することなくマグノリアを平和に治め、農業・商業の振興にも力を注いだ。その胸元は常に赤く輝く不思議な宝玉で飾られ、その石は『騎士のハート』と呼ばれて王家代々の宝物となった。

レイラはマグノリア王国中興の祖として後の世に数々の伝説を残すこととなったが、特に有名なものとして『見えざる騎士』の伝説がある。

女王の傍らには常にもうひとつの影があったという。それはいついかなる時も女王を守り、共に野を駆け、静かな夕べには月明かりのもとで美しい庭園を連れ立ってそぞろ歩いたとも伝えられている。

『マグノリアの咲くとき』 おわり

(後書き)

投稿結果：コバルト短編小説新人賞【もう一步】  
(相羽みゆ名義)

マグノリアの咲くとき

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2563e/>

---

マグノリアの咲くとき

2009年3月24日09時46分発行